

思考力・判断力・表現力を高める活用型音楽学習の実践

時得 紀子*・松井千鶴子**・内海 昭彦***

1 はじめに

2008年1月に出された中央教育審議会答申では、各教科での基礎的・基本的な知識・技能の習得と同時に、それぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を充実させることを重視する必要があるとしている。そのうえで「各教科におけるこのような取組があってこそ総合的な学習の時間における教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な活動も充実するし、各教科の知識・技能の確実な定着にも結び付く。」として、各教科での基礎的・基本的な内容の「習得型」の学習と総合的な学習の時間の活動における「探究型」の学習との間の「活用型」学習の充実の重要性を示している。

習得した知識・技能等の学習成果を「探究型」の学習に結び付けるための「活用型」の学習について、安彦は「本来『活用型』の学習は、『習得型』の学習成果を『探究型』の学習に結び付けるために考え出されたものであり、この意味で『探究型』の学習に結び付く『活用力』を育てることが主眼でなくてはならない。」とし、「活用型」の学習における主たる目的は、各教科における発展的な学習によって、その一部となる教科内部の知識・技能の活用経験を与え、「活用力」を育てることによって、総合的な学習の時間での「探究型」学習を充実させることにある、としている。

このような、「習得」と「探究」との間にある「活用型」の学習と新学習指導要領に基づく音楽科の学習活動を結び付けて考えたとき、音楽科における思考力・判断力・表現力の育成と「活用型」学習との関連性は大変重要であると言える。すなわち、音楽科において、「活用型」の学習活動を展開していく上で音楽的な要素や仕組みなどを知覚し、感受したことをもとに「思考」「判断」する活動を充実させていくことによって、音楽の知識・技能を活用し「探究」の活動へと結び付けていく「活用型」の学習を展開していくことが重要であると考えられる。加えて、音楽科は音や音楽に関する学習を展開する教科であるが、音や音楽自体は「環境的な側面」や他の教科で扱っている「動き」や「視覚的材料」との密接な関連性があるものである。音楽科の学習を展開する上で、こうした「環境」や「動き」「視覚的材料」等も含めた総合的な学習展開によって、より子供たちの生活に密接にかかわる学習が展開されるという指摘もある。

これらを整理すると、音楽科における「活用型」の学習を展開する上での重要な側面が見えてくる。すなわち、音楽科の教科内での、思考力・判断力・表現力の育成という面と、教科内で学習したことを総合的に生活と結び付けることによって、総合的な音楽の力を身に付けさせていくという面である。このような側面同士を関連させ、音楽科の「活用型」学習を見直していく際には、教師のカリキュラム・マネジメント（教育課程・指導方法の見直し・改善）が重要であると捉える。

本論では、こうした、音楽科における「活用型」学習を展開していく上でのカリキュラム・マネジメントへの提案として、以下の2つの視点からの考察を試みる。

一つ目の視点は、音楽科の教科内における「習得」から「活用」の流れを重視し、子供の思考力・判断力・表現力を高めていくための学習活動のマネジメントという視点である。そこでは、教師の授業展開上の工夫について、学習心理学や認知心理学の知見から得られる示唆を音楽科の活動に適用し、実践につなげる試みを行う。特に、授業展開における教師の「仕掛け」について、明らかになったことをもとに一つの提案を試みたい。

二つ目の視点は、教科の枠を超えて他教科とのつながりをもたせた中で、音楽を中心として他の表現領域に広がる活動による、総合的な「活用」という視点である。ここでは、音楽科で習得したことを、教科の特性を重視しながら「活用」していく学習活動を展開した実践をもとにしたカリキュラム・マネジメントの例を紹介する。そして、これらの活動から得られる示唆をまとめることによって、「活用型」音楽学習の一つの提案を行っていく。

2 音楽科の授業展開における「活用型」学習

学校教育で行われる音楽の授業において、こうした「活用型」学習を展開する上で不可欠であるのが、既存の音楽学習の展開と性質を異にする学習活動の展開の工夫である。言い換えると、「活用型」学習を展開するためには、授業を組み立てる上で、カリキュラム展開上の工夫をいかにし、習得した内容を「活用」させるか、その「仕掛け」をいかにつくるかが重要であるといえる。無藤（2010）は、「習得」した知識・技能を用いて「思考」させる指導で「活用」する力が身に付くとし、『『活用力』は『思考力』とはほぼ同義と考えてよいでしょう。ただし、漠然とした思考は『活用』とは言えません。『活用力』は『何かを用いて考える力』です。焦点を絞って子供に思考させる、『思考の焦点化』を行う必要があります、教師の手立てが不可欠です。』と述べ、「活用型」学習を展開する上で、教師が子供の「思考の焦点化」をマネジメントし、「手立て」を講じることが重要であることを指摘している。

また森（2008）は、学習心理学や認知心理学における「学習の転移」と学校教育の実践の場での「活用力の育成」とに関連させ、いくつかの重要な示唆を提示している。森によれば、ある文脈で学習したことを別の新しい文脈で活用する「転移」は、課題をよく理解しながら学習することによって生じるという。すなわち、学習過程において活用を促すためには、課題をよく理解させるための指導方法が展開される必要があり、児童の理解を確認する術が重要であるという。その上で、文脈を超えた転移を生じさせるための方策として、

- ①学習の際に、ある特定の事例を課題として与え、その後に事例と類似した課題を追加する方法
 - ②課題を特定の文脈で学習させた後、「もし～だったなら」という質問をして、課題の一部が相違している場合を考えさせる方法
 - ③たくさんの考える要素を含んだ課題を出し、その解決策を考えさせる活動によって多様な考えを引き出すような方法
- などを提案している。

音楽科における「活用型」学習を展開するにあたって、こうした示唆は重要であると考えられる。これら、教師の手立てによる子供の思考の焦点化と、学習における文脈を超える転移をスムーズに起こさせる学習過程をどう組むかという課題への対応について、筆者らは二つの方向性での展開の可能性を模索した。

以下は、こうした示唆を踏まえ、音楽科の学習の中で、ある文脈で学習したことからの「転移」を引き起こし、別の文脈での「活用」を促すような活動を展開するための方策としての、音楽科における「思考活動」を展開した事例及び、教科の枠を超えて生活との関連性をもたせた事例について紹介する。

3 音楽科の教科内での「活用」をねらった実践の概要

ここでは、小学校5年生の「音楽づくり」の学習において、経験に基づいた音楽的な要素や仕組みの感受から思考・判断・表現へという学習の流れを組織した事例を紹介する。

この実践は、地域の伝統的な音楽を題材にしている。この事例で取り上げた「安兵衛太鼓」は新潟県新発田地域に広く伝わる伝統芸能で、江戸時代の武士「堀部安兵衛」にゆかりがあり、地域の各学校、団体において様々な形で今に伝えられているものである。今回はこの題材をもとに、「音楽づくり」の活動として学習を構成した。

本実践では、学習した事柄の「転移」を起こす教師の仕掛けとして、前述した森の主張中の「たくさんの考える要素を含んだ課題を出し、その解決策を考えさせる活動によって多様な考えを引き出す方法」を応用している。

具体的には、子供にとって自らの経験に照らし合わせて想像を働かせやすい「地域に伝わる伝統芸能」をテーマにし、それを見聞きた経験と、校内で代々受け継がれてきた演奏の伝統をもとに、リズムづくりの活動を展開する。この活動の中で、子供たちがそれまでの経験で身に付けてきた「学習し習得した内容」を活かしながらその音楽的な内容を「活用」し、学習したことを「転移」できるような活動の流れを構成した。

(1) 「習得」段階における学習経験の積み重ね

「音楽づくり」の学習においては、音楽的な要素や仕組みに基づいた音楽遊びの経験の積み重ねが重要である。そこで、学年の年間指導計画の中に、意図的に「音楽遊び」と「音楽づくり」の活動を位置付けた。そのうち、定期的に音楽科の学習の中で行う音楽遊びを「プチ創作」と名付け、音楽遊びの活動で、リズムの組み合わせの面白さの発見から、リズムパターンを作る活動や音や音楽の面白さを体感させる活動を行った。例を挙げると、リコーダーの学習の後に、リコーダーで「鳥の鳴きまね」をつくって順に演奏したり、歌詞中の2字や3字の単語のもつリズムを活かして「音の

輪リレー」をしたりするなどである。その際、調性にとらわれない音階や、拍節的でない自由リズム、声を出して合わせることや裏拍重視のリズム感等の伝統的な音楽の特徴を紹介し、活動の中に取り入れさせ、体感できるようにした。

また、「音楽づくり」の活動のうち、音楽の要素や仕組みに注目させ、音を音楽にしていく活動を一つの題材に集中させ、その活動の中で、多様な考える要素を含んだ課題を設けた。こうした「音楽づくり」の活動において「学習したことを転移させる」活動を設定した。

加えて、子供たちの活動をより経験に基づいたものにしていくために、視覚資料をもとにした活動や経験を想起する活動を行った。ここではまず6年生の「安兵衛太鼓」の演奏や地域の祭りである新発田祭りでの木やりなどの映像を鑑賞した。そして、心を躍らせるリズムの特徴や、聴き手にその迫力やメッセージとして伝えたいことを効果的に伝える楽器の使われ方に焦点をあて、聴き取ったことをまとめさせた。このようにして楽器の音色や奏法の特徴などを感じ取る活動を行った。

(2) 「習得」から「活用」段階における学習の組み立て

習得した内容をもとに「音楽づくり」の活動において「転移」を引き出す学習活動として、「安兵衛太鼓」の演奏の中に、自分だけのオリジナルな部分をつくらうと投げかけ、「どんな場面を音で表したいか」「どんな思いを込めたいか」などの意図や思いを引き出す活動を試みた。

そこでは、活動の上で「思考の焦点化」を行わせるため、子供たちにもなじみの深い「木やり」の歌詞をもとにしたリズムづくりを提案した。なお、学習活動の一部は、同時に行っている総合的な学習の時間での「安兵衛太鼓の伝統を引き継ごう」の単元の一部として実施した。

① 単元の指導計画

時	学習の流れ	○おもな学習活動	・研究とのかかわり
1・2	「木やり」を練習しよう	○新発田祭りで唄われる「木やり」を想起する ○6年生の「木やり」をビデオ視聴する ○ゲストティーチャーを招聘し「木やり」の実演を聴く	・それまでに学習している「木やり」についてより詳しく知り、再確認することによって「習得」している内容が「転移」しやすい状況をつくる
3	「木やり」のリズムを感じよう	○よく知っている「木やり」の中に含まれるリズムの要素を見付けよう	・〔共通事項〕の内容でもある、「リズムの要素」に焦点化させ、「木やり」の中の言葉や節まわしから特徴的なリズムを感じ取らせる
4・5	6年生の演奏や新発田祭りから考えたことを文章に表わそう (総合的な学習の時間で2時間)	○新発田祭りのビデオを視聴し、オリジナル太鼓に込めたい気持ちをまとめよう ○6年生が演奏した「安兵衛太鼓」のビデオを視聴し、太鼓の演奏から感じたことを感想にまとめよう	・子供たちの「演奏に込める思い」や「表現したいこと」をまとめることによって「表現を引き出す要素」を形成し、習得したリズムの要素を「転移」させる下地をつくる
6	オリジナルリズムを作ろう	○自分の「思い」や「伝えたいこと」をもとに2小節の太鼓のリズムをつくらう ○強弱をつけて完成させよう	・「習得」したことを「転移」させる活動 ・音楽的な要素(リズム)と言葉の抑揚や自分の思いなどを反映させ、オリジナルリズムをつくるという「転移」を促す
7	できたリズムを発表し合い「よい点」「アドバイス」を伝えよう	○できたリズムを発表し、友だちからよい点やアドバイスを伝えてもらおう	・言語でのコミュニケーション活動によって互いの作品について考えたことを伝え合い、自分の作品の振り返りと音楽的な深まりを促す

② 指導の実際

ア 「こうしたい」「こうつくりたい」という思いや考えをもってつくる活動

新発田祭りでは、「台輪」と呼ばれる町内に古くから伝わる山車(だし)が轆かれる。その際、轆き手の士気を高めるために唄われるのが「木やり」である。実践校では、「二葉小木やり」というものがあり、安兵衛太鼓の演奏と同時に唄われてきた。この「二葉小木やり」の歌詞をもとに、太鼓のリズムをつくる活動に取り組んだ。

この「二葉小木やり」は、毎年、校内の行事や対外的な発表の場でも6年生が唄っているものである。実践校では、11月の後半から、総合的な学習の時間や音楽の時間を通して6年生から口伝で5年生に伝えられる伝統が築かれている。

また、校内での発表の機会も多いことから、子供たちにとっては入学したころから幾度となく耳にしている親しみをもった曲である。

〈二葉小木やりの歌詞〉

1. そろ～た そ～ろた～の～ ふた～ばの わ～かいしゅうと いね～の で～っほのように それさあ よく そろたよ～	2. にの～じ や～まあから ふき～おろす か～ぜは ふた～ば い～ちいばんと それさあ ゆいて ふくだよ～	3. ふた～ば わ～かいしゅうと たい～この い～きは ここ～ろ き～りいりと それさあ まめ しほりだよ～
しめろ～ えっさ よいやらせ～ せ～のやれこらせ どっこい せ～のせ～ これは いさむよ～ や～れ～		

まず初めにこの「二葉小木やり」を練習し、木やり独特のリズム感を味わった。その後、「二葉小木やり」の中にみられるリズムパターンを抽出した。その際に、言葉の抑揚や長短などのリズムの要素について意識させる働きかけを行った。

子供たちが抽出したリズムは次のようなものである。（「ドン」や「ドド」は太鼓の表面を、「カッカ」や「カカ」は太鼓の棹打ちを表す。）

・ドドンカカ	・ドンドンカッカ	・ドドンドドン	・カッカドンドン	・ドドーンカ	・ドンドコドンドン
・ドドンドドン	・ドドドドン	・カカカッ	・ドーンカカドンドン	など	

次に総合的な学習の時間と関連させ、これらのリズムと、自分が表したい、太鼓に込めたい思いとを合致させるため、新発田祭りに参加した時の自分の思いや上学年である6年生が新発田祭りで演奏したビデオなどを見た感想などを書かせた。

感想の中に見られた子供たちの「太鼓に込めたい気持ち」は次のようなものであった。

- ・祭りの楽しい気分
- ・伝統を受け継ぐのが緊張する
- ・二葉小を自慢したい気持ち
- ・6年生みたいになっこのいい演奏をしたい
- ・（堀部）安兵衛のように強い心を持ちたい
- ・みんなの気持ちが合わさっている など

そこで、これらをまとめたものを子供たちに提示し、自分のオリジナルリズムをつくる活動に入った。

まず、自分が考えた太鼓に込めたい気持ちをもとに、2小節のリズムを考えさせた。

[A児（女子）の考えたリズム]

リズム： カッカドッド ドッドドン ドッド ドッド ドッドドン
言葉： ふたばの 伝統 やすべえ だいこ

次に、このリズムをよりよく表現するために、強弱を考えさせた。

[A児（女子）の強弱の工夫]

リズム： カッカドッド ドッドドン ドッド ドッド ドッドドン
言葉： ふたばの 伝統 やすべえ だいこ
中ぐらいの強さ だんだん強くする

イ 音楽的活動の評価・相手の考えのよさを認める活動

続いて、つくったリズムを発表し合い相手の演奏の中で「よい点」「感じたこと、考えたこと」の伝え合いを行った。音楽的な表現の深まりを追究するためにこうした言葉でのコミュニケーション活動が有効であると考え、相互評価と、評価に基づく改善へ向けた話し合いの活動を行った。ここでは、発表したリズムについて「よい点」「アドバイス」を出し合わせた。

B児（男子）からA児（女子）へ

C児（女子）からA児（女子）へ

- ・言葉とリズムが合っている。
- ・最後にだんだん強くするところが、感じが出ていい。

- ・「伝統」のところを強くしたらどうか。
- ・リズムに気持ちが入っていて面白いリズムになっている。

そこで、A児は友達からの「よい点」「アドバイス」を基に、強弱の面でリズムに反映させた。

[A児（女子）の2回目の強弱の工夫]

リズム： カッカドッド ドッドドン ドッド ドッド ドッドドン
言葉： ふたばの 伝統 やすべえ だいこ
強弱： 中ぐらいの強さ 一番強く だんだん強くする

その後、言葉の内容が近い子供同士でグループを組ませ、リズムをつなぎ合わせ、8小節のオリジナルリズムを構成した。



写真1 できたリズムで合わせよう

実践校の「安兵衛太鼓」の編成は「大太鼓」「たる」「中太鼓」「チャンチキ」「笛」であるが、今回は中太鼓を使つてのリズムづくりを中心に行った。

中太鼓でのリズムをつくった後、自分の担当する楽器での演奏も行った。「チャンチキ」以外は中太鼓でのリズムをそのまま当てはめることができたが、「チャンチキ」はたたき場所とたたき方を変えるアドバイスをしたところ、自分たちの楽器に合わせたたたき方に変更して演奏することができた。

授業の最後には完成したリズムを使つてすべてのパートを合わせて8小節のオリジナル部分を加えた「安兵衛太鼓」を演奏して授業を終えた。



写真2 全部のパートで合わせてみよう

(3) 本実践の「活用型」音楽学習としての意義

本実践では、音楽科の学習において「習得」した内容をもとに子供の思考力・判断力・表現力を働かせ、新たな音楽的な価値へと「転移」させていく活動を意図的に組んだ。

音楽科においては、学習指導要領解説音楽編で、〔共通事項〕として音楽科の活動を通して共通に指導していく内容が明示された。そこでは、音楽的な要素や仕組みに基づいて、知覚したことをもとに、思考・判断し表現に結び付けていくことの重要性が示されている。こうした、〔共通事項〕に基づいた活動を音楽科の授業で行っていく際に、自分の「思い」や「伝えたいこと」を明確にし、それを表現にどのように組み込んでいくか、という「思考」の活動が重要となる。今回はこうした「思い」や「伝えたいこと」を言葉で表し、その言葉のリズムや抑揚を太鼓のリズムに転換していくという活動を構成した。「音楽づくり」の活動において「思考」を働かせる際に「言葉」とのかかわりをもたせてリズムづくりをしていくという試みは島崎らの「音楽あそび」の実践によって様々に取り組まれている。本実践においても、子供たちの「思い」や「伝えたいこと」を比較的スムーズに表現に結び付ける手段として有効であったと考える。

また、本実践では、「思い」や「伝えたいこと」を生かしてつくったリズムについて、相互評価する活動を取り入れている。ここでは、言葉のやり取りによる音楽的な内容についての考えの伝え合いを取り入れた。音楽科では、「音楽」を媒介としたコミュニケーションが重要である。しかし、そうした「音楽」によるコミュニケーションを円滑に進めていくためには、言葉による互いの「考えの伝え合い」や「評価のし合い」、など、言葉によるコミュニケーションについても重要であると考え。こうした、音楽的な内容についての言葉でのやり取りを取り入れることも、音楽科における「活用型」の学習を進める上で重要な視点であろう。

このように、音楽科の活動の知覚や感受の場面で、感じたこと、考えたことを言葉によって捉えなおす「思考」の場と、言葉に変換して捉えたことを表現したり、友達に伝えたりする「コミュニケーションの場」を経ることによって、よりよい演奏につなげていくことが、音楽科における思考・判断・表現の活動の中心であると捉える。

本実践を通して、こうした背景をもとに、音楽科における「活用型」学習展開の方策として、次のような活動を行っていくことが大切であることが分かった。

- 音楽の要素や仕組みをもとにした学習経験を積み重ねる活動
- 「思い」や「伝えたいこと」に支えられた表現を引き出す思考・判断の場
- 言葉による音楽的活動の評価・相手の考えのよさを認める活動

これらの活動を授業の中に組み込むことを通じて、音楽科の基礎・基本を生かした「習得」の活動を展開し、「思い」や「伝えたいこと」と音楽との関連を図る活動及び、言葉によるコミュニケーションによって「思考の転移」を促すことが、音楽科における「活用型」学習を展開する上で重要な視点であると考え。

4 教科の枠を超えた「活用型」音楽学習の実践

(1) 大手町小学校第6学年創作組曲の実践

上越市立大手町小学校では、昭和60年に創作組曲「高田の四季」を発表して以来、第6学年の活動として継続して組曲の創作に取り組んでいる。生活活動¹⁾や総合的な学習の時間で追究したことを表現する活動として、毎年、その学年の追究テーマや教科・領域の活動との関連のさせ方、担任や子供たちの願いに応じて、取り組み方や音楽づくり、発表方法などを工夫してきた。そこでは、自分たちの思いを創作組曲にし、発表会で表現するという一連の活動があり、子供たちが、総合的な学習の時間や音楽科、国語科、そして生活の中で身に付けた知識や技能を活用する姿があった。次に創作の25年間の歴史のうち3つの実践について整理し、「活用型」音楽学習としての意義について考察したい。

① 昭和60年度「高田の四季」

大手町小学校は、昭和52年度から6年間、文部省指定の研究開発学校として教科と生活活動の2領域による教育課程を編成し、身近な地域の自然・社会・人間に体ごとにかかわる体験的活動を重視してきた。

6年生では、5年の終わりにから学年全体で取り組むマーチングバンドの活動で身に付けた音楽的能力を生かし、それを一層高めていく総合的な活動として組曲の創作に取り組むことにした。さらに、地域を舞台とした様々な体験活動で感じた喜びや驚きを詩や曲で表現することで、自然や社会を一層鋭く見つめることができると考えたのが発想の原点である。

創作組曲を中心とした6年生の体験活動の年間計画を表1に示した。当時6年生の生活活動は105時間あり、その一部である50時間に、国語科と音楽科の時数を20時間取り入れ、全体として70時間で活動が構成されている。年間を通して高田を見つめたり、高田とかかわる活動をしたりしながら、四季それぞれの曲を作って発表をする。そして、3月には、それがまとまって組曲「高田の四季」ができて上がるという年間を通した活動になっている。

実際の曲作りは個人やグループで行われ、それを学級や学年、子供たちから選出された組曲委員で検討し修正していくことを繰り返している。例えば、冬の曲を作る活動では、「一人1曲を作ろう」というテーマをもって活動を進めた。それは、子供たちが、これまでの春、夏、秋の曲作りを通して、曲を作る楽しさと同時に、四季折々の変化や美しさを発見することの喜びも感じ取ってきていることから、このような組曲への一人一人の意欲や熱意を大切にしたいと考えたからである。

まず、一人一人の子供が「初雪」「スキーの楽しさ」「待ち望む春」「人々の心の温かさ」などのテーマをもって、曲作りに取り組んだ。木琴で舞い降りる雪のイメージを探りながら、また、降り続く雪の感じをエレクトーンの流れるような旋律で表そうとするなどして、127のメロディーができた。その後、同じテーマの子供が集まり、メロディーを確かめ合いながら、一小節ずつ検討し、テーマに合うメロディーを作り上げていった。

表1 「組曲『高田の四季』を作ろう」年間活動計画²⁾

月	体験的活動70時間（生活活動50+教科から20）		共同的活動 マーチングバンドほか
	組曲作りと発表	調査・体験・話し合い	
4	・春の詩作成 ・春の曲作りと、組曲全体の構想 ・高田の夏発見と曲作り	・春を探しにサイクリング ・高田公園の春探し ・東京の旅（高田との違いを見付けよう） ・ひまわりの栽培 ・地域に飛び出せ（謙信太鼓や高田の民謡を学ぼう）	・新曲に挑戦、振り付けの創造 ・運動会パレード ・老人スポーツ大会に参加 ・上越祭りパレード
8			
9	・秋を探し、秋の曲作りに生かす。 ○学級・学年発表会 ・秋の曲作り ○大手子供祭りで発表：組曲「春と夏」 ○上越市音楽祭で組曲の一部を発表	・小川未明の季節感 ・大根の栽培 ・高田のよさ発見（雁木や格子戸を絵画に） ・たくあん、はりはり漬け調理 ・冬の前の高田公園	・上越市陸上大会で演奏 ・5年生へのマーチングバンド指導
12			
1	・冬の曲作りと、全体の見直し ・仕上げと練習 ○お別れ発表会で発表：組曲「秋と冬」	・高田の四季を見つめて（卒業記念文集） ・小川未明の詩を木彫レリーフに【卒業記念制作】 ・雪像作りとスキー遠足	・移杖式
3	組曲「高田の四季」を歌って卒業しよう（卒業演奏発表会）		

② 平成15年度「みちを歩む」³⁾

この年の総合的な学習の時間は、様々な道を歩いて感じたことや考えたことを書きためたり、道にかかわるもの・こと・人について調べたりすることを通して、自分の歩むみちについて考えた。表2にまとめた概要のとおり、組曲にかかわって、音楽科と国語科と関連を図り、それぞれの時数を取り込みながら指導している。

まず11月に、国語科の単元「話し合って考えを深めよう」で、「卒業プロジェクトを立ち上げよう」をテーマに話し合いを行い、自分の伝えたいことを分かりやすく話したり、相手の話の意図をくみ取って聞いたりすることを目指した。そこでの話し合いをもとに、記念品プロジェクト、卒業記念宿泊プロジェクト等の一つとして、組曲プロジェクトが作られた。

ここからは、組曲プロジェクトが中心になり、学級や学年に働きかけながら組曲を創作していくことになる。まず組曲プロジェクトでは、1年間の活動を通して感じたこと、考えたこと、これからの思いを一人一人に詩に表現してもら

うことにした。集まった詩を「道のよさ」「わたしたちと道の関係」「私たちの歩んで来た道」「私たちの歩む道」などのテーマに分け、テーマごとに詩を整理し、まとめていった。そして、テーマごとの詩ができ上がったところで、学年全体で検討する時間を設定した。そこでは、「道には点字ブロックや自然、雁木があるというよさばかり書いている。それだけじゃなくて、悪いところもある。どっちもあるのが道なんだと変えた方がいい。」「自分が実際に歩くことによって、道と友達になったというところに、道が私たちに語りかけてくれる言葉を入れたらどうだろうか。」など、自分たちが学んだことを表すための言葉や内容について意見を出し合った。それをもとに、組曲プロジェクトが修正をし、それをまた全体に示すという活動を数回繰り返した。そして、詩がおおよそ決まったところで、それぞれが希望するテーマに分かれて曲作りに入った。それぞれのテーマごとのチームでは、互いに考えるメロディーを口ずさみながら考えたり、リコーダーやピアノなどで音を確認したりしながら、メロディーを決めていった。楽譜の書き方等曲づくりに必要な基本的な知識については音楽の授業で全体に指導し、子供たちはそれをもとに自分の思うメロディーを考え、楽譜に表していった。自分たちが考えるメロディーやリズムが複雑で楽譜に表せないというときには、口ずさんだものを録音し、それを音楽の得意な先生に楽譜にしてもらおうということも行った。

曲がおおよそでき上がると、全体に聞いてもらい、意見をもとに修正するという活動を何度か行い、完成となる。続いて、でき上がった曲から全体で練習する時間をとった。ここでは、組曲プロジェクトが中心になって音取りから始め、「ここはもっとやさしく歌って」「ここはもっと元気よく」など、曲の表し方についても子供たちが考え、練習を進めていった。また、組曲プロジェクトは、伴奏の和音を付けたり、楽器の組み合わせについて考え、練習も行っていた。このように組曲プロジェクトを中心にしながら詩や曲作りを行うというような形で進められていった。ここでは、子供たちの活動が主体的に行われるようにしながら、総合的な学習の時間や国語科、音楽科の学習の目標や指導内容が達成できるように担任や音楽主任などの指導があることは言うまでもない。

表2 「みちを歩む」の概要⁴⁾

月	総合的な学習の時間（○数字は時数）	音楽科	国語科
4	みちを歩む～道を歩く～③⑤ ・学校周辺の道を歩き、気付きの集積 ・上越市内の特徴的な道を歩き、様々な気付きの集積	・夢をのせて② ・レッツ マーチング⑧ ・曲のまとまりを感じて④	・作品に出会う・作者に出会う⑩
8	・「道」のイメージマップ作り		
9	みちを歩む～道を見つめる～②⑤ ・自分が歩きたい道を歩き、気付きの集積 ・道にかけられた願いや苦労 ・他県の特徴的な道を歩き、上越市の道との比較 ・お互いの気付きの交流	・曲の気分をとらえて④ ・レッツ マーチング⑤	・生き方や考え方を読み取ろう⑩
12	みちを歩む～道をつくる～②⑩ ・道を創ってきた人の生き方 ・感じたことや考えてきたことを詩に表現	●きれいな響きで⑩ (道にかかわる創作組曲)	●感動を言葉に⑩ (道に関する詩)
1	みちを歩む～みちを歩む～③⑩ ・自分の歩みみち（文集の作成） ・1年間の活動を通して感じたこと、考えたこと、これからの思いを詩に表現 ・詩に曲を付けて組曲の作成 ・お別れ発表会での組曲発表	●明日に向かって⑩⑪ (道にかかわる創作組曲)	・伝えたい何かを見つけて発信しよう⑩⑪
3	卒業記念発表会		

③ 平成19年度「なりたい私 未来の私」

この年は、「この社会で生きていくこと わたしの大切にしたいこと」をテーマに、生活・総合学習⁵⁾で追究を進め、1学期から創作活動を行い、見通しをもって組曲の創作に取り組んでいくことにした。概要を表3に示した。

まず、6月に学年のテーマソングを作ることにした。そこでは、学年全体の話し合いを行い、自分たちの「きらきら学年」から連想する言葉を集め、特に多かった「キラキラ」と「仲間」を「決め言葉」にすることにした。そして、「きらきら学年」から始まり、決め言葉に結び付くイメージマップ作りを行い、出てきた言葉をつないで1つの文章を作り、それをもとに一人一人が短冊にイメージを書き、思いが似ているものを集めて分類していった。次は、同じ分類のグループで集まり、それぞれのイメージをすり合わせながら言葉を一つにつなぎ合わせていった。そして、その文章

のイメージに合うリズムや音、BGMなどを探し、文章に重ねた。使用する楽器は、様々な音色をもつ電子ピアノを中心に、鉄筋・木琴、打楽器、効果音CDなどを準備した。

あるグループでは、「友情の結晶を輝かせる」という言葉に着目し、「優しい光を放つようなイメージ」と決めて音探しを始めた。「“優しい” だから柔らかい感じだね。」「あんまりテンポが速いとイメージが崩れちゃうもんね。」などと、グループ4人で言葉を交わしながら、自分たちのイメージに合う音を探した。そして、「グロッケンを使ってやさしい音を出す。リズムはゆっくりでちょっと響く感じで。」と、テーマソングの歌詞づくりへのイメージを膨らませていった。学級全体で交流し合って共通のイメージに絞り、6年1組が「仲間」をテーマに1番、2組が「キラキラ」をテーマに2番の歌詞を担当し、学年テーマソングを完成させていった。

2学期は、生活・総合学習で職場体験学習や企業訪問などを通して、「働く」ことについて学びを深めた。これらの活動で学んだことを詩や文に書きためて、それをもとに組曲の創作に取り組んだ。「働くことは大変だけど、喜びもあるから続けられる」「人と人とのふれあいや笑顔が大切」など、子供の思いが表現された曲ができ上がった。3学期には、卒業への思いをもとにした曲をつくり、これまでにつくった曲の構成を考えて組曲を完成させた。

表3 「創作組曲」3領域を横断する年間の活動の流れ⁶⁾

	総合学習	ふれあい	音楽科
4月	○活動のテーマ設定 ○働く人へのインタビュー活動 ○きらきらワーク（職場体験学習） ○宿泊体験学習（職場体験・企業訪問） ●学びをもとにした組曲づくり【創作組曲Ⅱ】 ・小中合同音楽祭での組曲発表 ・お別れ発表会での組曲発表	○「学びのノート」で自分見つけ ●学年テーマソングづくり【創作組曲Ⅰ】 ○異年齢・同年齢集団による様々な活動 ○宿泊体験学習 ●卒業プロジェクト活動 ・組曲プロジェクト他 ●卒業への思いをもとにした組曲づくり【創作組曲Ⅲ】	○音楽だいすき学年を目指して ・マーチングバンド練習 ・2部合唱、愛唱歌等での表現活動 ●主体的、創造的に取り組む音楽活動 ・組曲のメロディーづくり ・管楽器フェスティバルの練習 ・小中合同音楽祭の練習 ・移杖式の練習 ・お別れ発表会の練習 ・卒業式「創作組曲」の練習
3月	卒業記念発表会		

(2) 教科音楽から見た「創作組曲」の意義

大手町小学校では、25年間にわたって「創作組曲」に取り組んできている。どの年も、教科音楽の時数を取り込んだり、関連的に指導したりすることにより、総合的な学習やふれあい（道徳・特別活動）の活動を充実させてきた。一方、教科音楽から見たとき、どのような意義があるのか考えてみたい。

① 表したい、伝えたいという思いに支えられた表現活動

「高田の四季」では、自分たちが調べ、意味付けてきた高田の四季それぞれのよさを詩や曲で表したい、そして、在校生や保護者に伝えたいという思いがある。「みちを歩む」では、様々な道について調べ、自分の歩むみちについて考えたことをまとめ、伝えたいという思いがある。「なりたい私 未来の私」では、「働く」ことについて学んできたことをまとめ、伝えたいという思いがある。

このような、学んだことを表現したい、そして伝えたいという思いがあって活動が始まり継続していくのである。そして、この思いは、6年生の終わりの卒業記念発表会まで継続される。なぜなら、大手町小学校の総合的な学習は、一つのテーマを1年間を通して追究していく。だから、自分たちが追究しているテーマの答えは1年の終わりにならないと出ないのである。つまり、創作組曲で伝えたい内容は、日々更新される。だから、数か月から1年間という長期間を通して組曲を作るという活動が成り立つのである。新学習指導要領解説音楽編でも改訂の要点として「(5)音楽づくり」の中で、「音を音楽に構成する過程を大切にし、〔共通事項〕に示す音楽の仕組みを手がかりにして、児童が思いや意図をもって音楽を作るようにすることの重要性」を挙げている。

さらに、村川（2006）が「『伝えたい』気持ち力が表現力向上の決め手」と言っているように、自分が学んだことを在校生や保護者、地域の人に伝えたいという思いが、詩やメロディーの吟味になり、発表のための練習にも根気強く取り組めるのだと思われる。

② 学習したことを活用し、新たな知識や技能を取り込もうとする場

組曲を創作する活動は、6年生にとって決して容易なことではない。子供たちは、当然、低学年での音楽的な約束事に沿ったりリズム遊びやふし遊び、中学年での即興的な表現や音楽の仕組みを生かした音楽づくり、5年生での音楽づく

りの学習を生かしてリズムやメロディーを考えていく。そこでは、音楽を形づくっている要素や音符、休符、記号や音楽にかかわる用語を活用して考えたり表現したりする姿がある。また、「自分が考えたリズムをどう表せばいいのか教えてほしい」というような指導を求める姿もある。組曲の創作が、子供自らが新たな知識や技能を取り込もうとする場にもなっていると考えられる。

このように、表したい、伝えたいという強い思いがあるとき、子供たちはこれまでに学んだ音楽の技法や形式を自らの力で活用するのである。西園・小島らは、「表現したいという内からの欲求は、『総合的な学習』での諸経験を通して形成される。その欲求に形を与えていくとき、音楽科での学習が生きてくる」「そこでは、音楽科の学習が子供にとって必然性を持って為され、音楽の技法や形式が自分の内面とつながったところで行われる」と述べている。創作組曲の活動には、自分が表したいことのために音楽の技法や形式を「活用」する瞬間があるのではないかと捉える。

③ 協同して音楽を作り出す喜び

上記の3つの事例とも、テーマに沿った詩や文章作成、曲づくりやBGMづくりにどの子もかわり、それを少人数のグループ、あるいは学級、学年全体で検討しながら活動を進めている。また、発表会に向けて、完成した曲を練習したり、録音してみんなで検討したりして、自分たちの伝えたいことがこれで伝わるかどうかを考える場が大切にされている。気付いたことを出し合い、みんなで検討したり練習したりしながら、自分たちの目指す音楽に近づけていくという活動を通して、協同することのよさや協同して歌ったり演奏したりすることのよさを感じ取ることができる。

協同する喜びや感動の体験を共有することができるのも音楽活動の特性である。一人一人の子供が自分の役割をもって、お互いの声や音を聞き合いながら全体の響きを感じ取っていく。そして心を合わせて演奏する喜びを味わう。こういった音楽科で充実を求められている協同して音楽を作り出す喜びが、創作組曲にはあるのである。

④ 思考・判断・表現の一連の活動の保障

創作組曲には、思考・判断・表現する一連の活動が保障されている。上記の3つの事例とも、個人で、あるいはグループ、学級、学年で思考する場面がある。「このテーマに合った言葉やリズム、メロディーはどんなものか」「人に伝えるためには、どんな演奏にしたらいいか」など、様々に思考する。そして、同時に、「ほくたちの表したい気持ちは、こっちのメロディーの方が伝わる」と判断しながら創作を進めていく。そして、伝えたい人に伝わるような表現方法を考えて演奏したり、「もっとこうしよう」と自分の考えを表現したりする場面もある。このように、創作組曲には、思考力・判断力・表現力を一体的に育てる場があると捉えている。

これは、中央教育審議会答申の中に、音楽科の課題として挙げられている「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力」の育成に結び付くものであると考える。

(3) 「活用型」音楽学習としての「創作組曲」の意義

新学習指導要領では、「各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること」が示されている。「この知識と技能を使ってこの音楽を表現する」というような「活用」の方法も考えられるだろう。しかし、それだけでは、子供自らが何をどのように「活用」するのかを考える力は育たない。自分の願いや目標の実現のために、自らが知識・技能を「活用」することが必要である。こうした子供たちの「活用」する力を引き出すための策として、教師の総合的な学習の時間や音楽科の枠を超えたカリキュラム・マネジメントが求められるのである。創作組曲は、子供たちが「習得」した内容を「活用」するための道筋を示すカリキュラム・マネジメントの産物なのである。創作組曲では、願いや目的が明確であり、卒業記念発表会で発表するという活動の見通しももちやすい。そのため、子供たちはこれまでに学んだことやもっている知識や技能を活用して願いや目的を実現しようと動き出す。そうすれば、自らもっている知識・技能から選び取り、「活用」しようとする。「活用」するのは、学校で学習したことに限らない。自分の好きな音楽のリズムを「活用」したり、自分の得意な楽器の演奏技術を「活用」したりできる。また「活用」しようとする知識や技能が不足していれば、自らそれを求めて動き出す。このように、創作組曲では、子供自らが知識・技能を選び取り「活用」することが可能となる。

5 今後の課題と展望

冒頭でも述べたように、新学習指導要領では、「習得」した内容について、特定の文脈から「転移」させる思考活動を行うことによって、学習した内容を「活用」させる「活用型」の学習が重視されている。音楽科においても教科内での思考力・判断力・表現力を発揮させるような学習展開の工夫によって学習したことを「活用」し、内容の理解が進むカリキュラム・マネジメントが重要である。本論では、教科内での「活用」を促す学習展開と教科を超えた総合的な学

習における「活用型」音楽学習について論を進めたが、いずれにおいても、教師が学習活動を設定する上で、十分に「習得」から「活用」への流れを意識した学習活動を構成する力量を高めることが重要となる。その意味で、本論の中でも取り上げたような、認知心理学、学習心理学における知見を応用し、カリキュラム・マネジメントに取り入れていくことが重要であると考えられるものである。

また、音楽的な活動において思考を働かせるには言語を媒介とした活動が重要な役割を果たすことも見逃せない点である。授業マネジメントについて十分に検討し、音楽科における言語を媒介とした活動を活性化するための仕組みづくりによって、言葉をもとにした表現の活動、及び言葉によるコミュニケーションをもとにして、思考・判断する様子が見られ、音楽的な表現に深まりが見られると考える。加えて、音楽科においても、言葉でのコミュニケーションにより、相手の考えのよい点を取り入れたり、互いのよい部分を認め合おうとしたりする動きが生まれ、相手の表現のよさや、自分の考えとの違いを認める態度や能力の育成につながるような学習展開を工夫することは重要な視点である。

音楽は、芸術の一部として、他教科の活動とのつながりをもたせやすい性質をもっているといえよう。そうした意味で、生活への応用や生活の中での利用の実感を伴った「活用」のさせ方を探っていくことも重要な視点である。それゆえに、本論で紹介した事例は子供の活動の意欲を引き出し、生活への音楽の意識的な導入と、学習した内容を活用するものとして多くの示唆を含むと考える。

子供の教科の枠組みに対する意識は、極めて柔軟性に富むものであると筆者らは捉えている。教師のカリキュラム・マネジメントのさらなる工夫を通して、学習したことが実感を伴って身となり、骨肉となっていくような「活用型」の音楽学習が今後積極的に展開されるべきであろう。本論で紹介したような事例をもとにして、さらなる研究を積み重ねていくことが喫緊の課題である。

引用・参考文献

- 安彦忠彦 監修 坪能由紀子・伊野義博 編著『小学校 学習指導要領の解説と展開』 教育出版 2008
- 安彦忠彦 編著『「活用力」を育てる授業の考え方と実践』図書文化社 2008
- 島崎篤子『音と友達・音楽あそび』音楽之友社 2003
- 上越市立大手町小学校創立120周年記念事業実行委員会『大手町小学校創立120周年記念誌』1993
- 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」文部科学省ホームページ、2008
- 時得紀子 編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社 2009
- 時得紀子・小林田鶴子・内海昭彦「表現力を高める『音楽づくり』についての一考察」名古屋女子大学紀要 2011
- 新潟県上越市立大手町小学校『生活する力を育てる教育 続・雪の町からこんにちは〔教師編〕』日本教育新聞社 1987
- 新潟県上越市立大手町小学校『大手町プラン2007「人間力」をはぐくむ教育課程の創造』2007
- 西園芳信・小島律子『総合的な学習と音楽表現』黎明書房 2000
- 無藤 隆 『「習得」した知識・技能を用いて「思考」させる指導で「活用」する力が身に付く』Benesseホームページ
- 森 敏昭『活用力を育てる授業の考え方と実践』図書文化 2008
- <http://benesse.jp/berd/center/open/syo/view21/2009/01/s02toku-01.html> 2010
- 村川雅弘・酒井達哉『感動を生み自信を育む子供と教師がともに成長する総合的な学習充実化戦略のすべて』日本文教出版 2006
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社2008
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』2008

注

- 1) 上越市立大手町小学校では、昭和52年度から3年間の研究開発学校の指定を受け、教科と生活活動による二領域活動を提案した。
- 2) 同上『生活する力を育てる教育 続・雪の町からこんにちは〔教師編〕』p.230をもとに筆者らがまとめた。
- 3) 現大手町小学校教頭の阿部勉先生、現上越市立南本町小学校教諭飯野浩枝先生へのインタビュー調査をもとにまとめた。二人は、この年の第6学年の担任である。
- 4) 上越市立大手町小学校『研究のまとめ2003確かな学力をはぐくむ』2004年、p.122「第6学年年間カリキュラム表」をもとに筆者らがまとめた。
- 5) 上越市立大手町小学校では、平成18年度から研究開発学校の指定を受け、「生活・総合学習」「ふれあい」「教科」の3領域による教育課程を編成した。
- 6) 同上『大手町プラン2007「人間力」をはぐくむ教育課程の創造』p.51